平成 11 年度第 2 回総合目録データベース実務研修レポート

# 西洋古版本の目録作成と参照 MARC の利用について

関西大学図書館
河原田伊左男

## はじめに

日本の大学図書館は、インキュナビュラを始めとして 1830 年頃までの間に出版された西洋古版本 (1) を多数所蔵している。こうした貴重な資料は速やかに整理し、その目録情報を公開すべきであるが、目録作成に苦心している図書館も多いと思われる。筆者自身、こうした資料の前で途方に暮れている一人である。

現在、大学図書館の職員数は削減される一方であり、人事異動のサイクルが短くなっている大学も多い。加えて、図書館の目は電子図書館に向いている。このような状況下で、西洋古版本の目録を作成することができる図書館員を今後養成していくことは困難である。それゆえ、学術情報センターの総合目録データベース（NC）に目録を登録する作業の負担を軽減するため、参照 MARC を活用したいところだが、西洋古版本については参照 MARC に不十分な点が見うけられる。そこで今回のレポートでは、西洋古版本に関する参照 MARC の状況と問題点を調査し、よりよい参照 MARC について考えたい。

## １　西洋古版本の目録作成

西洋古版本の目録作成がはかどらない理由として､次のような点を挙げることができる。

・図書の記述言語がラテン語や古英語などであったり、Fraktur を始めとするドイツ活字体で印刷されているなどから、言語に対する広範な知識が必要である
・タイトルページ一面に本タイトルやタイトル関連情報､責任表示などが表記されており、どの部分を目録に記述すればよいかが分かりにくい (2)
・一般図書の目録規則に加え、稀覯書に関する目録規則に習熟しなければならない
・折記号や判型など、一般の図書では行わない類の書誌記述が必要とされる場合がある
・西洋古版本と一口に言っても、記述言語や出版年代などはさまざまであり、それぞれに対応が異なる点があるにも関わらず、所蔵冊数に限りがあるため、多くの資料に触れて経験を積むということが難しい

こうした点をカバーするため、冊子体の目録・書誌類を参照し、目録を作成してきた。有名なところでは、*The British Museum Catalogue of books printed in the fifteenth century*（BMC）等のようなインキュナビュラの目録や、総合目録としては、*The National union catalog, pre-1956 imprints*（NUC）等がある。NUC は、約 1,200 万点というデータの量の多さから、特に利用されることが多いと思われる (3)。ただし、アメリカやカナダの 700 館以上の図書館のカード目録をまとめたものであるため、データのレベルは一定ではない。例えば、上に挙げた折記号や判型については、記述を行なっていないものが多

く見うけられる。では、こうした記述は不要なのかといえばそうとは言えない。その重要度については、池内健次「西洋古版本の形態の記述について」に詳しいので、少し長いが引用しておく。

> 現代の図書ならば，形態の記述は凡その厚さ・大きさなどをページ数や高さ何センチで示せば充分，殆どの場合はそうまでせずとも同定できるだろう。しかし，印刷・出版・ 製本事情がちがう曽っての時代の本，しかも何百年の伝来の経過において破損や再製本等の変化を受けたかもしれない古書の場合は，校合なしでは，これがその本だと識別同定 identify することもできないことがしばしばである。そして校合という以上，手漉き紙に手引印刷機で印刷された本 hand-printed books については，判型を確認することが最小限のことであり，判型の調査と関連して折帖記号や図版を調べてその本がどのような物理的形態的 physical な構成になっているかを記述することこそが書誌記述の基本要素なのである。(4)

２　参照 MARC 利用の問題点

伝統的な冊子体の目録・書誌類は有用なものだが、こうしたツールを全ての NC 参加機関が所蔵しているわけではない (5)。それゆえ、NC での目録作成・登録では、参照 MARC の必要性は高いと思われる。また、オンラインのデータを直接流用でき、パンチ入力の手間が省けるので、作業の負担軽減につながる。

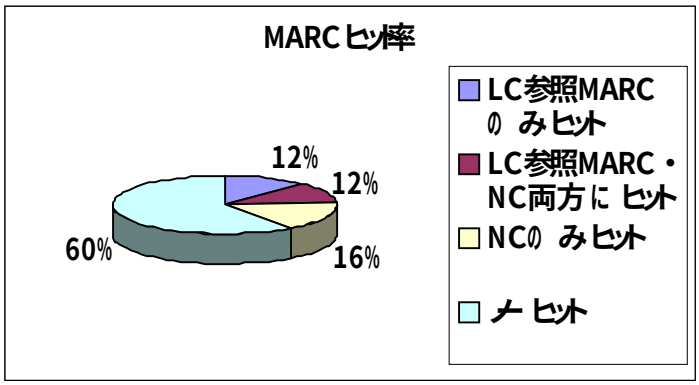
ところが、西洋古版本については参照 MARC に問題があるのもすでに知られているところである。ここでは、参照 MARC の量的・質的問題について検証する。

（１）参照 MARC の量的問題

1999 年 10 月 1 日現在、洋書については、LC、UK、GPO、DN の４種類の MARC が参照 MARC として収納されている。このうち、最も収納レコード数が多いのは LCMARC である (6)。そこで、西洋古版本についてどの程度ヒットするのか調べるため、古典と呼ばれる図書資料について、LC の参照ファイルと NC をそれぞれファイル指定して検索した。検索した古典は、『西洋をきずいた書物』（東京：雄松堂書店，1977）にある、15 世紀から 1800 年までに出版された 253 点から選んだ 50 点である。

この結果、LC 参照 MARC にのみヒットしたものが 6 件（検索対象全体の 12%）、LC 参照 MARC と NC 両方の MARC にヒットしたものが 6 件（同 12%）、NC にのみヒットしたものが 8 件（同 16%）であり、どちらの MARC にもヒットしなかったものは 30 件（同 60%）となった（ただし、版違いや復刻版はヒットとみなさなかった）。

つまり、LC 参照 MARC にヒットし、流用入力可能なものは 24%、検索対象の約 4 分の 1 である。これは参照 MARC の収納目的から考えると、少ないと言わざるをえない。NC にのみヒットした 8 件の資料は目録が新規作成されたのであり、どちらにもヒットしなかった 30 件については、今後 NC で目録が新規作成される可能性があるということである。




（２）参照 MARC の質的問題（LCMARC の質的問題）

次に、参照 MARC の質について述べる。先に、NUC のカード目録のレベルは一定ではないと述べたが、MARC についても同じことがいえる。ここでは例として、『西洋をきずいた書物』にもある Thomas Hobbes の *Leviathan* の MARC を挙げたい。

1651 年刊の *Leviathan* を検索すると、NC では 5 件ヒットするのに対し、LC 参照ファイルではオリジナル資料についての MARC はノーヒットである。そこで、ウェブ上で公開されている LC のオンライン目録 (7) を検索すると、1 件ヒットする。これは参照 MARC ではないので、本来ここでとりあげるべきではないのだが、LCMARC であるため参照 MARC になる可能性があったことと、MARC の質を述べるのに分かりやすいものなので、あえて取り上げたい。

・ *Leviathan* のデータ

```
LC Control Number: 08032909
000 00698nam 2200205u 450
（中略）
100 1_
 |a Hobbes, Thomas, |d 1588-1679. [from old catalog]
245 10
 |a Leviathan;
260 __
 |a London, |b Printed for A. Ckooke [i.e. Crooke] |c 1651.
300 __
 |a 394 p. |c 29 cm.
650 _0
 |a Political science |y Early works to 1700. [from old catalog]
650 _0
 |a State, The. [from old catalog]
991 __
 |b c-RareBook |h JC152 |i .H65 1651 |t Copy 1 |w PREM
```

*Leviathan* のタイトルページに 1651 年と表示されているものは 3 点ある [8] とされている。それぞれの特徴は次の通りである。

・A 版　タイトルページにいわゆる「熊」の飾り模様がある
　　"Crooke"であるはずの 出版事項の人名が"Ckooke"となっている
・B 版　タイトルページにいわゆる「人の頭」の飾り模様がある
・C 版　タイトル中の単語の綴りが A ・ B 版と異なる部分がある（forme-form、ecclesiasticall-ecclesiastical、civill-civil）

上記の MARC は、出版者のフィールド 260B の、"Printed for A. Ckooke [i.e. Crooke]" から判断して、A 版のデータであることが分かる。しかし、本タイトルのデータ "Leviathan;"のあとに続くべき"or, The matter, forme, and power of a commonwealth, ecclesiasticall and civill"が抜けている点と、飾り模様に関する注記がない点から、データそのものとしては不備があると言わざるを得ない。加えて、パンクチュエーション記号も現在とは異なる箇所があるので、流用する際には細かな修正を要する（この点に関しては、上記 MARC だけの話ではなく、他の西洋古版本のデータにも共通する）。

これはあくまで一例ではあるが、*Leviathan* のような有名な図書でさえこのようなデータであるとすれば、他の目録データはどうなのか心配なところである。

（３）参照 MARC 流用時の注意点

ヒットした参照 MARC を流用する場合にも注意すべき点がある。

外部 MARC を参照ファイルに収納する際、フォーマット変換を行なっているが、各目録作成機関のデータ作成基準等が異なるため、機械的には変換しきれない部分が存在する。そこで、参照 MARC から流用入力する場合はデータを NC の基準・規則に合わせなければならない。各参照 MARC の流用時の注意事項については、過去のオンライン・システムニュースレターに順次掲載されている。

・ LC/MARC
　→「参照 MARC 流用時の注意について（３）」オンライン・システムニュースレター No. 47
・ UK/MARC
　→「参照 MARC 流用時の注意について（４）」オンライン・システムニュースレター No. 48
・ DN/MARC
　→「参照 MARC 流用時の注意事項（５）DN/MARC」オンライン・システムニュースレター No. 64

これらに加えて、西洋古版本については、別の点についても留意しなければならない。レポートの２（１）でヒットしたデータからいくつか挙げておく。

・ PTBL に記述されるべきデータが REM フィールドに記録されている
　LCMARC を参照 MARC に変換するとき、PTBL には LCMARC のタグ 440（副出するシリーズ）、あるいは、シリーズ副出標目ブロック 800 - 840 のデータを置き換えている。ここで挙げたケースでは、タグ 490（副出しないシリーズまたは別の形で副出するシリーズ）

のシリーズ名が参照MARCのREMフィールドに記録され、490のペアとなる800がPTBLに記述されている。シリーズ名としては、タグ490のデータの方が適切であるケースが多いので、必要であればREMフィールドからPTBLに移す。

・ALにLCのコレクション名が記入されている

手元のコピーとは無関係なので、削除する。

・LCCNにデータがある

LC参照MARCから流用入力されたと思われるNCのデータで、LCCNにデータが入ったままのものが目立つ。新刊書と異なり、1でも引用したように、コピーごとに形態を始めとして違いがある西洋古版本で、LCCNのデータを残すべきなのか疑問である。

３　利用したい外部MARC

LCMARCを始めとして、現在収納されている参照MARCはおそらく西洋古版本のデータについては遡及入力で作成されていると思われるので、現時点でヒット率やデータの質が低いのもある意味では仕方がないことなのかもしれない。そこで、他の外部MARCのうち、西洋古版本について有用であろうものを一つ挙げておきたい。Consortium of European Research Libraries (CERL)によるThe Hand Press Book Database (HPB)がそれである。

CERLは、1992年にできた、ヨーロッパ各国の国立図書館や大学図書館などの研究図書館のコンソーシアムである。その第一の目標は、1455年ごろから1830年までにヨーロッパで印刷された刊本（西洋古版本）すべてをMARC化することである。このデータベースは、参加機関の目録ファイルをまとめたものであり、ユニオンカタログのようになっている。レコード件数は1999年6月現在で約81万レコード。Full membersとして35館、Associate membersが21館、Special membersが3館となっている。

書誌記述はISBD(A)をコンソーシアムとして推奨しており、この点からも西洋古版本のMARCとしてぜひ利用したいところである[(9)]。

ただし、

・データベースがResearch Libraries Group（RLG）の中にあり、会員制である

・各国で作られたMARCを取り込んでいるため、書誌の転記エリア以外のデータ（注記など）もその国の言語で記述されている

という問題点がある。

まとめ

西洋古版本の目録作成とNCへの登録について、参照MARCを中心に検証した。レポートで扱った参照MARCはLCMARCに偏ったきらいはあるが、収納レコード数の多さなどからみて、妥当なのではないかと考える。

西洋古版本については、多くの冊子体目録・書誌が刊行されているが、全国の大学図書館を中心としたNC参加機関で総合目録データベースを構築していくには、全ての参加機関からアクセスできる参照MARCの充実が不可欠である。その例として、CERLによるHPBを挙げた。本論では取り上げなかったが、同じくRLGからアクセスできるThe English Short Title Catalog（ESTC）などの外部MARCの導入も検討すべきであろう。

ただし、ISBD（A）を推奨するHPBと、簡略標題目録のESTCではデータ記述のレベルが

異なるのはいうまでもない。今回のレポートでは触れなかったが、この点に関しては、NCでの西洋古版本の書誌記述をどのレベルにするか、積極的に検討すべき時期が来ているといえるであろう。

注

（1）

これまで、西洋古版本とは1800年までに出版された書物とされてきたが、現在では1830年ごろまで範囲が広がっている。

「現在、ヨーロッパの国立図書館協会はヨーロッパで手引き印刷機によって刊行された書物のデータベース Hand Press Book (HPB)を構築している。協会はその時代範囲をグーテンベルクから一八三〇年までとした。－（中略）－このような基準に準拠すれば、「西洋古版本」の下限も一八三〇年とすることができよう」

雪嶋宏一「西洋古版本とは何か」『古本共和国』No. 13（1998年），3頁.

（2）

高野彰『洋書の話』増補版.（東京：丸善，1995），62 頁には、標題紙の転写について「西洋の文字は左から右へ、上から下へと書かれているので、この順に転写していく」とある。

（3）

長澤雅男『情報と文献の探索』第3版.（東京：丸善，1994），252頁に次のようにある。「米国、カナダの 700 館以上の主要な図書館に所蔵されている図書（1955 年以前に発行されたもの）を収録対象とし、その所蔵館を指示している。2000 万枚以上の目録カードを整理し、約1200万点を収録」

（4）

池内健次「西洋古版本の形態の記述について」『ビブリア』第94号（1990年5月），154頁.

（5）

例えば、NUCをWebcatで検索したところ、所蔵館は10数館である。所蔵館全てが登録しているわけではないので、全国の大学図書館の所蔵状況が分かるわけではないが、多くの図書館が所蔵しているといえる数字でもない。

（6）

LC図書書誌は1968.1-1999.8のレコードで6,026,088件。各参照MARCの収納状況については、http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/marc.htmlにデータがある

（7）

http://lcweb.loc.gov/catalog/online.html

(8)
高野彰『洋書の話』増補版.（東京：丸善，1995)，60 頁.

(9)
HPB が会員制であることから、筆者はこのデータベースを検索できず、CERL と RLG のホームページからの情報をまとめることしかできなかった。ただし、RLG の HPB 紹介のホームページでは、サンプルレコードが１件挙げられている。
http://www.cerl.org/
http://www.rlg.org/hpb.html

参考文献


・池内健次「西洋古版本の形態の記述について」『ビブリア』第 94 号（1990 年 5 月).
・高野彰『洋書の話』増補版．東京：丸善，1995.
・『西洋をきずいた書物』J.カーター・ P.H.ムーア編、西洋書誌研究会訳．東京：雄松堂書店，1977.
・カーター，ジョン『西洋書誌学入門』横山千晶訳．ビブリオフィル叢書．東京：図書出版社，1994.
・雪嶋宏一「西洋古版本とは何か」『古本共和国』No．13（1998 年).
・長澤雅男『情報と文献の探索』第３版．東京：丸善，1994.
・『マークをうまく使うには：機械可読目録入門』黒沢正彦・西村徹編．東京：三洋出版貿易，1987.
・学術情報センターホームページ http://www.nacsis.ac.jp/nacsis.index.html
・LC のホームページ http://lcweb.loc.gov/catalog/online.html
・CERL のホームページ http://www.cerl.org/
・RLG のホームページ http://www.rlg.org/hpb.html